

第26回山のトイレを考えるフォーラムの報告
誕生！「日高山脈襟裳十勝国立公園」
～日高の山を愛し、地域で活動している仲間から学ぶ～

山のトイレを考える会

〔日 時〕 2025年（令和7年）3月15日（土） 14時30分～17時

〔会 場〕 札幌エルプラザ4階「大研修室A・B」

〔参加者〕 66名



1. 開催目的



立ち見席ができるほどの参加者

- (1) 日高山脈襟裳十勝国立公園は2024年（令和6年）6月25日に誕生した。今回のフォーラムの目的は、地元の山を愛し登山道、避難小屋そしてトイレなどの維持管理に熱心に取り組んでいる山岳団体の活動を知り、現場の実情と課題をみんなで共有することとした。
- (2) 一方環境省や自治体等は日高山脈襟裳十勝国立公園協議会を設立、今後「国立公園ビジョン」「地域ルール」「マナー」「行動計画」等が協議・策定される。現場の声が行政に届くよう、官民が一体となって保護と適切な利用を推進するため、どのようにコミュニケーションを図り、取り組みを進めていくべきかを一緒に考えることとした。

2. 第1部 発表（活動報告）

（1）トイレ維持は感謝と恩返し

発表：新冠ポロシリ山岳会 事務局長 堤 秀文 氏

新冠ポロシリ山岳会はイドンナップ山荘と新冠ポロシリ山荘の維持管理、そして幌尻岳（2052m）の登山道整備を担っている。

イドンナップ山荘は市街地から約50km離れており、新冠ポロシリ山荘はさらにその19km先にある。この道は北海道電力の管理道路となっており、登山者は19kmを歩いて新冠ポロシリ山荘にやっと到着する。

登山者の多くは、1日目に新冠ポロシリ山荘に一泊し、2日目に幌尻岳に登頂した後、もう一泊し、3日目にイドンナップ山荘まで長距離を歩く、2泊3日の行程をとっている。

イドンナップ山荘のトイレは汲み取り式。男子小便器2基と洋式トイレ2室があり、維持管理している。

新冠ポロシリ山荘のトイレはプレハブトイレ（男子小便器1基と和式便器1基）と仮設トイレ（和式便器1基）がある。夏期シーズンは毎月、2トントラックに載せたバキューム装置で汲み取り搬出処理している。



発表する堤秀文氏



イドンナップ山荘



新冠ポロシリ山荘・トイレ・汚物集積箱



車載型バキューム装置



裏から見たプレハブトイレと仮設トイレ

困難な汲み取り作業、プレハブトイレや車載型バキューム装置の老朽化、資金難などの課題を抱え、なぜ「トイレ維持は感謝と恩返し」なのか？堤さんの報文を資料集に掲載しているので、一読願いたい。



(2) 幌尻山荘の携帯トイレ導入3年目を終えて

発表：(一社)平取町山岳会 事務局長 藤田 英幸氏

幌尻山荘には小屋内1室、小屋外に仮設トイレが2基、水力発電を使ったバイオトイレ（男子小便器1個、洋式便器1個）がある。

2005年から2019年まで幌尻山荘の貯留式トイレのし尿を一斗缶に汲み取り、額平川を渡渉して人力で担ぎ下ろし処分してきた。

人力運搬も重労働で限界を迎えていることから、2019年に携帯トイレの導入を検討した。2020年から新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、その年と2021年の2年間は山荘が閉鎖となった。

2022年から「バイオトイレ以外は携帯トイレを使用する」大規模な転換をすることにした。小屋内トイレと屋外の仮設トイレを携帯トイレブースに改造。小屋前に携帯トイレ回収ボックスを設置。北電取水口に携帯トイレブースと回収ボックスを設置。またシャトルバスや山荘等で携帯トイレを販売するなど、携帯トイレ導入に向けた環境整備に取り組んだ。



発表する藤田英幸氏



小屋内トイレを携帯トイレブースに改造



小屋前に携帯トイレ回収ボックスを設置

当初は、使用済携帯トイレを登山者自身が持ち帰り、北電取水口の回収ボックスに廃棄するようお願いしていた。しかし、実際には小屋前の回収ボックスに廃棄する登山者が多く、結果として山岳会が人力で運搬せざるを得ない状況となった。

その労力を少しでも軽減するため、小屋前の回収ボックスへの廃棄は500円を徴収することにした。それにより小屋前の回収ボックスに廃棄する人は少なくなったが、水力発電機が故障してバイオトイレが使用できなくなり、携帯トイレの使用が激増した。

そのため、山岳会ではバイオトイレや小屋の夜間照明を復活させるため、可搬型エンジン発

電機を稼働させた。しかし、その燃料を人力運搬しなければならず、これまた多大な労力がかかることとなった。

バイオトイレの使用料として登山者から協力金1000円を負担していただくことにした。

携帯トイレ導入から3年が経過。以前のようにし尿を一斗缶で人力運搬することは無くなり、携帯トイレの使用も登山者に定着したが、使用済携帯トイレ、エンジン発電機の燃料運搬など、新たな課題と向き合うこととなった。



2024年も水力発電機の故障原因を特定できず、ソーラーパネルを設置したが、十分な電力を確保できず、エンジン発電機との併用となった。

平取町山岳会の携帯トイレ導入に至る経緯と現状の問題について、藤田さんが資料集に寄稿した報文は右のQRコードで見ることができる。

(3) 平成28年大雨被害後の伏美岳の現状

発表：十勝山岳連盟 理事長（芽室山の会） 上 嶋 寛 氏

伏美岳（1792m）の登山コース名は「芽室山の会コース」となっているように、芽室山の会（創設昭和35年：1960年。以下山の会と称する）が開削した山である。

山の会が創設された翌々年から登山道開削が始まり、苦闘の末、昭和52年10月に無名峰までの登山道が開通した。無名峰だったが、登山口付近の地名が伏美ということから「伏美岳」と命名。後に国土地理院の5万分の1地形図に記載された。



発表する上嶋寛氏

昭和52年には町事業で山小屋を建設、その後、ピパイロ岳までの登山道開削の難作業に取り組み、昭和59年8月に開通。山の会創設後25年の歳月を経て幌尻岳へ続くコースが完成した。



伏美岳登山口への林道崩壊（約7km）



崩壊が断続的に続いている

平成28年（2016年）8月の台風（集中豪雨）で、登山口までのトムラウシ沢林道（約7km）が断続的に崩壊、通行止めが続いている。当初は復旧の見込みが望めないほどの大規模崩壊であったが、2019年から林野庁による復旧



工事が開始された。

伏美岳の登山道は大きな被害はなく、林道崩壊後も山の会が登山道整備を毎年実施している。避難小屋の別棟トイレは汲み取りができないので使用禁止。携帯トイレの使用をお願いしている。なお、資料集に寄稿した報文を前ページのQRコードで見ることができる。

3. 第2部 パネルディスカッション

パネルディスカッションのテーマは本フォーラムのテーマと同じ。パネラーは第1部の発表者に加え、下記の3名。コーディネーターは当会代表の小枝正人が担当した。

- ・北海道大学大学院農学研究院 教授 愛甲哲也氏
- ・環境省 帯広自然保護官事務所 自然保護官 柳田邦玲雄氏
- ・環境省 新ひだか自然保護官事務所 自然保護官 草留大岳氏



愛甲哲也氏



柳田邦玲雄氏



草留大岳氏



小枝正人氏



パネルディスカッション
の記録(詳細)

(パネルディスカッションの要旨)

1. 国立公園になった2024年の8月に13市町村、北海道、環境省北海道地方環境事務所、森林管理署、北海道開発局、北海道運輸局、地元の登山関係団体、自然保護団体、観光関係団体、そして学識経験者で構成された総合型協議会「日高山脈襟裳十勝国立公園協議会」が設立された。
2. 協議会は国立公園の「ビジョン」「管理運営方針」「行動計画」について定める。
3. 協議会は各機関の長が出席する総会、その下に関係する団体の実務担当者が集まって中身を詰める幹事会がある。登山者に関する地域ルールとかマナーも議論される。
4. 国立公園として登山道の管理や整備を考える際には、日高山脈のもつ原始的な登山体験を維持し、過剰整備を避ける管理水準を関係者で共有する必要がある。
5. 協議会は現場にいる山岳会、登山に関わる人、地域の経済に関わる人、地域の住民が一人でも多く関わり、それらの人の意見が反映されるといい。
6. 地元山岳会も一生懸命に整備をして、技術指導もして、いろいろなイベントを開催して、皆さんが安全に楽しく登山ができる日高であることを発信していきたい。それを世の中にアピールする場が協議会でもあるかなと思っている。
7. 日高山脈の登山道は、ほとんど整備されていない山が多い。遭難事故の情報も結構入る。困難な山が多い日高山脈の登山者に対する安全管理をどうするか課題である。
8. 快適な登山のためには、バスの運賃とか宿泊利用料、トイレ利用料も支払う、受益者負担が当たり前になることを広報する必要がある。
9. 熊の出没情報を一つのプラットフォームに集約して発信すること。熊のリスクについての事前教育。熊スプレーの貸し出しなど、登山者を熊の事故から守る方策の検討が必要である。

(文責:仲俣善雄)